



アニメーション映画『千と千尋の神隠し』にみられる二重の異郷訪問話譚構造について：
ミハイ・ポップの「裏返し」モデルを適用した場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大喜多, 紀明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008725

アニメーション映画『千と千尋の神隠し』にみられる二重の異郷訪問譚構造について

―ハイポップの「裏返し」モデルを適用した場合―

大喜多紀明

一、はじめに

本論では、宮崎駿の監督によるアニメーション映画『千と千尋の神隠し』を異郷訪問譚として見做した上で、ルーミアの民俗学者ミハイ・ポツプがルーミアの物語である「兵士としての少女」の構造に見いだした、いわゆる、「裏返し」モデルを適用する視点に基づいての構造分析を行いたい。

『千と千尋の神隠し』は二〇〇一年七月二〇日に公開され、大ヒットをした長編アニメーション映画である。この映画は、日本以外でも、例えば、第五二回ベルリン国際映画祭金熊賞を受賞するなど、高い評価を受けており、現在、日本を代表するアニメーション映画の一つとして位置付けられている。

『千と千尋の神隠し』に関する学術的な研究は、心理学や物語分析などの視点から行われてきた。また、『千と千尋の神隠し』もしくはこの映画に関わる事柄を国語科映像教材として適用する試み（いわゆるメディアアリティ教育の国語教育への適用）については、遠藤²⁾や河原木³⁾、佐藤⁴⁾、二田⁵⁾らが報告している。本論の目的は、「歴史的」ともいえる興行成績をもたらしたアニメーション映画『千と千尋の神隠し』が国語教育の現場で映像教材として使用されていることを踏まえ、いわゆる物語論の視点からの分析的知見の提供を試みようとするものである。

本論の視座である物語分析の観点での先行研究には、西條の書

籍⁶⁾や、有田⁷⁾、田中⁸⁾、角田⁹⁾による論文などがある。しかしながら、本論における物語分析の手法であるポツプの「裏返し」モデルを『千と千尋の神隠し』に適用したものについては現在まで報告されていない。

ここで、ポツプの「裏返し」モデルについて大林は、物語の構造分析における syntagmatic（本論では「統辞的」と呼ぶことにする）な見方と paradigmatic（本論では「系列的」と呼ぶことにする）な見方の両面を統合した手法¹⁰⁾として位置付けた。なお、この大林による位置付けに関しては本論における前提として採用している。筆者は、『千と千尋の神隠し』へのポツプの「裏返し」モデルの適用が、この映画における、統辞的な見方と系列的な見方の両面を統合した構造に関する知見をもたらすものと考えている¹¹⁾。

二、物語分析の視点による先行研究

本節では、物語分析の視点からの検討を、映画『千と千尋の神隠し』に対して行った先行研究を示す。

西條は、『千と千尋の神隠し』を異郷訪問譚の一種として規定した上で、この映画の中に描かれた事柄に関して、他の異郷訪問譚との比較の中で分析した。また、西條はこの書籍の中で次のように書いている。

ハクを救うために千尋の出かける沼の底は、暗黒の世界です。そこは、湯場とは世界のちがうもう一つの異郷になっています。千

尋は異郷に行つて、さらにもう一つの異郷訪問をするのです。

このように二重構造になっている異郷は、これまでの物語ではあまりみかけませんでした。なぜ、千尋はもう一つの異郷に行くのでしょうか。異郷の中の異郷は、きわめてインパクトの強いプロットです。千と千尋の話が、なみの小説を超える文学性をもつのは、沼の底があるからです。

つまり西條は、『千と千尋の神隠し』が、次の二つの異郷訪問譚による二重構造で構成されていると解釈した。

- (1) 「トンネルの向こうの世界」への訪問譚
- (2) 「沼の底」への訪問譚

また、浅野は、『千と千尋の神隠し』が「行きて帰りにし物語」¹⁸⁾の構成¹⁹⁾を持ち、かつ、「大」と「小」の二段構成からなっていることを指摘した¹⁸⁾。

そうした見方をした場合、『千と千尋の神隠し』は、「千尋が、行つて戻ってくる」という一文に集約されるべきもの(いわゆるUターン)放物線の形に表現し得る)が物語全体の骨格であり、それに幾重も肉づけをしていった作品だととらえることができる。しかも、この作品において、「千尋が行つて戻ってくる」ところは、「不思議の町」(大)と「銭婆の家」(小)の二段構えとなっているところが、大きな特徴である。ストーリー(時間的順序にしたがつて配列された出来事の継起)ではなく、プロット(因果関係に基づいた筋立て構成)に注目して映画の物語を見なおせば、そのことは明白であろう。

一方、田中および有田は、神話学者であるジョゼフ・キャンベルが提唱した「ヒーローズ・ジャーニー」の形式²⁰⁾にしたがつてのパターン分析を行った。キャンベルは、英雄神話が、次の①から⑫に示した項目によ

つて構成されるとした。

- ① 日常の世界
- ② 冒険への誘い
- ③ 冒険への拒絶
- ④ 賢者との出会い
- ⑤ 第一関門突破
- ⑥ 試練、仲間、敵対者
- ⑦ 最も危険な場所への接近
- ⑧ 最大の試練
- ⑨ 報酬
- ⑩ 帰路
- ⑪ 復活
- ⑫ 宝を持って帰還

田中は、このパターンにしたがつて、『千と千尋の神隠し』を題材としての分析を次のように示した²¹⁾。

- ① 千尋たち家族は引つ越しの途中で、新しい家に向かう際に道に迷い、とある近代風のトンネルを抜け、寂れたテーマパークのような場所へ至る。
- ② 千尋の両親は、たどり着いた不思議な町で、無断で屋台の食べ物を食べしまい、豚にされてしまう。その後、橋の上であつた少年に川の向こうまで逃げると指示され、そこに向かう道中、日が暮れるにつれて、町に何か怪しげな雰囲気か漂い始める。
- ③ 川は水かさが増して向こう岸に渡れそうにない。千尋は頭を抱え、これは夢だと思ひこもうとする。
- ④ 町の隅でしゃがんで塞ぎ込んでいる千尋を、橋であつたハクとい

う少年が見つけ、肩を抱く。彼は千尋の味方だという。

⑤ 千尋はハクと共に湯屋^①の前の橋を渡り、ボイラー室から湯屋の中へ入る。そしてリンという湯屋の下働きの女の手を借りて、湯屋の最上階へとたどり着く。そこで湯屋の経営者である魔女、湯婆婆と会い、しつこい嘆願の結果、湯屋で働かせてもらうことになる。

⑥ 千尋は不思議な世界で新しい環境の中、働くことで様々な経験をする。

⑦ 湯屋では千尋が中へ引き入れた不気味な客、カオナシが湯屋の従業員を食らい肥大化し、最後には暴走する。ハクは湯婆婆の双子の姉の銭婆によって深い傷を負ってしまう。

⑧ 千尋はハクを救うため、姿を変えた湯婆婆の子の坊、湯婆婆の手下の湯バード、カオナシと共に、銭婆の元へ赴く。

⑨ 銭婆の家で時を過ごししていると、ハクが傷のない、白い竜の姿で家の前に現れる。その背中に乗って湯屋へ帰る途中、千尋は幼少の頃に自分が溺れた川の名前、ハクの本当の名前を思い出す。

⑩ 彼らは湯屋へとたどり着く。

⑪ 湯屋の前では湯婆婆が待ち構えており、契約を破棄するにはたくさん豚の中から、千尋の父母を当てろという。しかし千尋は冷静に、この中には自分の父母はいないと答え、見事正解を当て、ついに自由の身となる。

⑫ 川のそばでハクとお別れをし、千尋は元の世界へと戻る。千尋はトンネルを抜けた後、印象的な眼差しで道を振り返し、銭婆からもらった髪留めが一瞬光って、物語が終わる。

有田の場合も、キャンベルの「ヒーローズ・ジャーニー」の形式にしたがついて『千と千尋の神隠し』を分析した¹³⁾のだが、以下に示すように、田中の分析とは食い違いがある¹³⁾。

① 千尋は引つ越し先に向かう車中にいる。

② 森の中にトンネルの入り口を発見する。

③ トンネルをくぐろうとする両親を引き留め、自分は行かないと主張する(結局、両親について行く)。

④ 迷い込んだ異界で、湯婆婆と労働契約をするよう、ハクによってアドバイスされる。

⑤ 湯婆婆との契約を果たし、湯屋で働くことになる。

⑥ 非力な千尋は雑巾がけもろくにできず、まごつくばかり。カマジイとリンが親切にしてくれる。上役の従業員からきつい仕事に回される、必要なくすり湯の札をもらえないなど、嫌がらせを受ける。

⑦ 強烈な悪臭を放つクサレ神が店に近づいてくる。

⑧ 湯婆婆からクサレ神の世話を命じられ、河の神にもどすことに成功する。

⑨ 河の神からニガダンゴをもらう。

⑩ ニガダンゴを両親に食べさせれば元に戻れると考え、日常の世界に帰る方法を模索し始める。

⑪ ニガダンゴでカオナシの暴走を止め、ハクの呪いを解く。銭婆のもとに行き、ハクが盗んだ魔女の契約印を返し許しを得る。ハクに本来の名前を思い出させ、その「復活」を目の当たりにする。千尋自身も自信に満ちた少女に変貌する。

⑫ 銭婆からもらった髪とめとともに日常世界に戻る。

(12)での、田中と有田の論文に見られるような食い違いは、それぞれの著者が、物語のどの部分に焦点を当てて分析を行ったのかという解釈上の差異に因すると思われる¹³⁾。

本論は、西條が示した、『千と千尋の神隠し』が二つの異郷訪問譚で

構成された二重構造であるという知見に基づきつつ、さらに、それぞ
れの異郷訪問譚についての構造分析を、ポップが示した「裏返し」モデ
ルを適用する視点から行った。なお、本論では、主人公である千尋が
トンネルの向こう側にある「異界」を訪れる物語を「譚Ⅰ」とし、千尋
が錢婆の住む場所を訪れる物語を「譚Ⅱ」と呼ぶことにする。

「トンネルの向こうの世界」への訪問譚 Ⅱ「譚Ⅰ」
「沼の底」への訪問譚 Ⅱ「譚Ⅱ」

譚Ⅰの領域は、『千と千尋の神隠し』全体を覆う領域である。それに
対して、譚Ⅱの領域は映画の後半部分であるので、譚Ⅰの領域の中に
組み込まれていることになる。

三、ポップの「裏返し」モデル

本節では、本論で構造分析を行う上での分析の手法であるポップに
よる「裏返し」モデルについて述べる。

ポップは、ルーミアの民話の一つである「兵士としての少女」に、物
語の前半部分に描かれたテーマが、後半部分では、前半にテーマが出
現した順序とは正反対の順序で「除去」もしくは「否定」されるとい
う構造的な特徴を見出した。ポップが見出したこの構造を本論では「裏
返し」モデルと呼ぶことにする。この「裏返し」モデルに関して、大林（一
九七九）には、「構造分析における syntagmatic な見方と、
paradigmatic な見方の双方を統合する試み」として位置付けが示
された上で、日本における四例の異郷訪問譚（「イザナギの黄泉国訪
問」・「神功征韓譚」・「浦島子」・「甲賀三郎」）に「裏返し」モデルを適用
した実例が示されている。さらに大林は、「裏返し」モデルについて次の
ように書いている。⁵⁵

このように、異郷訪問譚は、『古事記』の昔から後世まで、少なく

とも『神道集』のころまで、一貫して前半と後半の裏返しという同
じ構造をもっていることが明らかになった。恐らく、さらにそれ以
後の時代の異郷訪問譚の多くにも、このような構造がみられる
ことが予想されるが、その点、今後の研究に俟たねばならない。
(中略)

私は小論において、日本文学から口承文学にもとづくと思われる
異郷訪問譚の例をとり上げ、そこには共通の約束があること
を論じた。もちろん、これは日本の異郷訪問譚の「ごく一部」にしか
過ぎない。日本文学上の他の作品、また現在の昔話や伝説にお
ける異郷訪問譚にも、同様な構造がみられるかどうか、また異
郷訪問譚以外にも、どのような説話にこの構造がみられるか、さ
らにこのような構造をもたない異郷訪問譚は、どのような構造を
もっているのか、の検討は今後の課題である。

つまり、日本における、口承文学にもとづくと思われる異郷訪問譚
においては、『古事記』から『神道集』に至る期間、一貫して「裏返し」モ
デルが適用できると大林は述べている。その上で、それ以後の時代の日
本の異郷訪問譚にも同様なモデルが適用できるのではないかと類推し
つつも、このことを今後の課題として残した。さらに、大林（一九七
九）でとりあげられた異郷訪問譚「口承文学にもとづくと思われる
日本文学」のみであり、「現在の昔話や伝説における異郷訪問譚」
や「異郷訪問譚以外」にも同様のモデルが適用されるか否かという点
についても、大林は今後の検討課題とした。

ポップと大林の知見を受け、依田は、韓国のいくつかの異郷訪問譚
を題材としての「裏返し」モデルの適用事例を示した。⁵⁶ 依田（一九
八二）には次のように述べている。

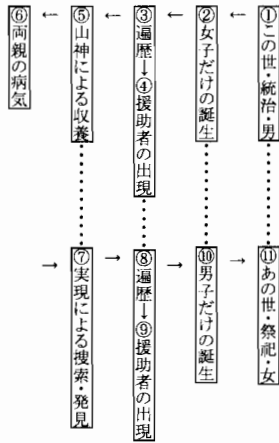
以上韓国の異郷訪問譚のなからバリ公主物語、作帝建伝説、
きこりと天女、地下の国怪盗退治等若干の例を選んでポップのモ
デルが適用されるか否か検証してきたのであるが、その結果、物

語の前半部と後半部が裏返しの関係にある構造は、韓国の場合、大林博士が検証した日本の例と同様に、昔話ばかりでなく神話や伝説にも共通してみられる構造であると思われる。

このように、物語に見出される「裏返し」モデルは、大林が異郷訪問譚の「共通の約束」⁵³⁾と位置付ける如く、異郷訪問譚における特徴的な構造である可能性があると言えようが、この分析の手法に注目した先行研究は決して多いとは言えない⁵⁴⁾。また、「裏返し」モデルを実際に適用した異郷訪問譚の事例数も限定される。

四、「裏返し」モデルの事例

ここで、「裏返し」モデルの実例を一例紹介したい。依田によると、「パリ公主神話」には、次の①から⑩のような構造が見出される。なお、左の図式は、依田の図式⁵⁵⁾に基づいて、筆者が加工したものである。



ここで、依田が示した①と⑩、②と⑨、③・④と⑧・⑨、⑤と⑦はそれぞれ「対立」・「対照」的な関係にあると述べられている。また、物語の前半はこの「世」を舞台としており、一方、後半は「あの世」が舞台である。以下、この物語の構造についてコメントした依田の文章⁵⁶⁾を引用

する。

このようにパリ公主神話に於いても⑥の両親の病気を転回点として、前半と後半が裏返しの関係になっていることは確かである。しかし以上考察して来たように、前半部と後半部のそれぞれに対応する項目、即ち第1図の①と⑩、②と⑨、③と⑧、⑤と⑦が逆の順序で次々に展開し、かつ同様のテーマがとり挙げられていることは明らかに認められるところであるが、その内容は単に前半の否定ないし対立というだけでなく、さまざまな変化や対照が認められることがわかるのである。

なお、ポップは、「裏返し」モデルでは前半の記述が、後半では、それそれ前半の「除去」あるいは「否定」として現れるとしたのだが、依田はそれに加えて、「この世」と「あの世」もしくは「男」と「女」のような「対照」による対応関係を因子とするパターンも、「裏返し」モデルのパリエーションとして位置付けている。ここで、本論では、依田の解釈に準じ、「対照」による対応関係も「裏返し」モデルの因子として扱うことにする。

五、『千と千尋の神隠し』の構造

本論では、映画『千と千尋の神隠し』を異郷訪問譚の一種として見做した上で、ポップの「裏返し」モデルに基づいた分析を行う。

本論の二節に示したように、本論の前提は、『千と千尋の神隠し』が二つの異郷訪問譚(譚Iおよび譚II)によって構成されているという点である。本節では、はじめに譚Iについての分析を行い、続いて、譚IIについての分析を行う。

【譚Iについて】

譚Iは、『千と千尋の神隠し』全篇である。ここで、「裏返し」モデ

イモリの黒焼き

切符

←与える

←与える

湯婆婆へ誘導

銭婆へ誘導

千尋が湯婆婆との契約を交わす前、ハクが千尋と会話する中で、ハクが千尋の名前を知っていることを告げた。一方、千尋が湯婆婆との契約を解除する前の場面では、千尋が、ハクの名前が「琥珀川」であることを思い出し、それをハクに告げたことをきっかけとして、ハクは自分の本当の名前「ニギハヤミヨクヌシ」を思い出す。つまり、はじめの場面では、ハクが千尋のことを知っていたのに対して、後の場面では、逆に、千尋がハクを知っていたことが描かれる。

また、③で千尋と湯婆婆の契約が交わされるきっかけは金爺が作っている。このとき金爺は、リンに「イモリの黒焼き」をわたし、千尋を無事に湯婆婆の所へ送り届けることを依頼している。一方、⑧では、千尋が銭婆の所へ行くための方法を教え、かつ、そのための切符を金爺が与えている。

④と⑦

④には、千尋がカオナシを油屋に引き入れる場面があるのに対して、⑦には、逆に、千尋がカオナシを油屋の外に導き出す場面が描かれている。さらに、詳細にみると、この箇所には次のような対比がある。

④引き入れる

⑦導き出す

洋服 洋服から作業衣
作業衣から洋服
マジナイ解けない マジナイ解ける

ハク 千尋がカオナシを油屋に引き入れる前、千尋は、現実世界で来た「洋服」から油屋で支給された「作業衣」に着替える。その後、ハクは、自分にマジナイ(呪詛)がかけられていて名前を思い出すことができない

いことを千尋に告げる。一方、千尋がカオナシを油屋の外に導き出す前、千尋は「作業衣」から「洋服」に着替え、ハクにニガダンゴを食べさせることをきっかけとして、結果としてマジナイを解くこととなる。

⑤と⑥

⑤には、河の主(オクサレサマ)にまつわる話が描かれているのに対して、⑥には、カオナシにまつわる話が描かれる。この部分の対比は次のようになる。

大湯	⑤河の主の業	⑥カオナシの業
客人	千尋とリン	青蛙
正体	オクサレサマ	上客
ニガダンゴ	河の主	カオナシ
砂金	受け取る	渡す
評価	本物	偽物
	千尋の手柄	千尋の落ち度

まず、⑤では、千尋とリンは大湯を掃除する係ではないのだが、大湯を掃除することになる。一方、⑥では、本来の掃除係である青蛙が、掃除のためではなく砂金を探すために大湯に来る。また、⑤では、河の主がオクサレサマの姿で油屋を訪れる。ここで、オクサレサマは油屋一同からは歓迎されない。一方、⑥では、カオナシが羽振りの良い客人として現れる。ここでは、カオナシは、油屋一同から上客として歓迎される。また、⑤では、オクサレサマだと思っていた客は、実は「名のある河の主」であることが判明する。逆に、⑥では、羽振りの良い客は、実はカオナシであることが判明する。⑤では、千尋は、河の主からニガダンゴを受け取り、河の主が去ったあとにはたくさんの砂金が残される。逆に、⑥では、千尋はカオナシにニガダンゴを食べさせ、カオナシの

出した砂金が土塊であることが判明する。そして、⑤では、河の主に
 かかわる一連の出来事が千尋の手柄として評価されるのだが、一方の
 ⑥では、カオナシにかかわる一連の出来事が千尋の落ち度として評価
 される。

以上のように、譚Ⅰは、前半と後半が裏返された構造によって構成
 されていることがわかる。その一方で、千尋らが異界と現実世界を結
 ぶトンネルを通る際、往きでの千尋の両親の言葉が、帰りにおいても再
 現されている。

父「足もと気をつけな。」

母「千尋、そんなにくつつかないで。歩きにくいわ。」

この二つの場面(カット58と「カット1373」)の絵コンテの画面を
 兼用する旨が、「カット1373」に、宮崎によって記載されている。⁵⁸⁾

また、異界にきた千尋に対するハクの言葉(ハク①)と異界から抜け
 出そうとする千尋に対するハクの言葉(ハク②)も類似している。

ハク①「ここに来てはいけない」

ハク②「後ろを振り向いてはいけない」

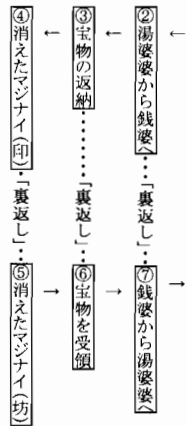
これらに関しては、物語の前半と後半における対比箇所であるが、裏
 返されたものではない。

【譚Ⅱについて】

譚Ⅱは、『千と千尋の神隠し』の後半、千尋が油屋を出て、銭婆(セ
 ニーバ)の住む場所を訪問し、油屋に帰還するまで出来事が描かれた
 一連の範囲である。この譚Ⅱは、千尋にとっての第二の「異郷訪問」で
 あると同時に、坊・湯・バードにとつては油屋での暮らしが日常であるた
 め、はじめての「異郷への訪問」としても位置付けられる。

譚Ⅱを「裏返し」モデルにあてはめると次のような図式となる。

①訪問の前……………「裏返し」……………⑧訪問の後



譚Ⅱを統辞的な視点から観察した場合、譚Ⅱは、①からはじまり
 ⑧へと至る構造である。一方、系列的な視点から観察すると、譚Ⅱは、
 ①と⑧、②と⑦、③と⑥、④と⑤がそれぞれ対応していることが確認
 できる。

ここで、系列的な視点による関連をさらに詳しく述べる。

〈①と⑧〉

①には、千尋・坊・湯バード・カオナシが銭婆の住む場所に訪問する
 前の様子が描かれている。一方⑧は、彼らが帰還した後の様子である。

①訪問の前 坊 歩けない
 ⑧訪問の後 坊 歩ける

← ネズミになる 元に戻る

湯バード ← 元になる 元に戻る

カオナシ ← ついて行く 戻らない

銭婆 ← 恐ろしい存在 やさしい存在

ここで、千尋に同伴した坊・湯バード・カオナシに注目したい。坊は、
 もともと一人で行くことができなかつた。しかし、銭婆のもとへの冒
 険の後には一人で行けるようになる。また、坊・湯バードは、訪問

の前にそれぞれネズミとハエに変えられる。逆に、帰還後には、彼らは元の姿に戻る。カオナシに関しては、訪問開始時には千尋について行ったのだが、帰還時には千尋について行かない。このことは、今まで居場所を見出すことができなかったカオナシが、その居場所を見出したことを示している。なお、湯バードに関しては詳細な記述はないが、異郷への訪問が湯バードの内面に何らかの変化をもたらしたと考えるべきである。このように、訪問前後を対比した場合、坊・湯バード・カオナシはそれぞれの成長を遂げていると解釈できる。

千尋は、譚Ⅰで大きな成長を遂げた。譚Ⅱは、千尋に触発された坊・湯バード・カオナシが成長を遂げ自立する過程を描いた物語⁵⁶であるとも言えよう。

さらに、訪問前、千尋は、銭婆が「恐ろしい存在」であるとカマジイから聞くが、訪問後ではそのイメージが一新され、千尋にとつては、銭婆は「やさしい存在」となる。

②と⑦

②には、千尋たちが油屋から銭婆の住む場所へ移動する様子が描かれている⁵⁷。逆に、⑦には、銭婆の家から油屋へ移動する様子がある。

②湯婆婆から銭婆

移動

地上

⑦銭婆から湯婆婆

空中

ここで、油屋から銭婆の住む場所への移動は地上(水上)を走る列車(海原電鉄)に乗ってである。一方、油屋への帰還は空中を白龍に乗っての移動である。ここで、地上(水上)と「空中」が対比されている。

③と⑥

③には、千尋が銭婆に魔法の印を返還する場面がある。それに対して、⑥では、千尋が髪止めを受け取る。

③宝物の返納

宝物

魔法に契約印

⑥宝物を受領

魔法に契約印

髪止め

特徴

魔法に関わる

魔法に関わらない

千尋が返した魔法の契約印の特徴は、魔法に関わるものであるという点である。一方、千尋が受け取った髪止めは、魔法でつくってはいけないという特徴がある。この点は対照的である。

④と⑤

④では、魔法の契約印にかけられたマジナイが解かれていることを銭婆が確認する。一方、⑤は、坊と湯バードにかけられたマジナイが解かれていることを銭婆が確認する箇所である。

④消えたマジナイ(印)

マジナイ 解けるべきでない

← 解けている

⑤消えたマジナイ(坊)

マジナイ 既に解かれている

← 解けていない

ここで、契約印へのマジナイと坊・湯バードへのマジナイとを対比すると、契約印の場合は、解けるべきでないマジナイが解けてしまっていた⁵⁸のに対し、逆に、坊および湯バードへのマジナイは、本来は解けていくべきものが持続していた⁵⁹。

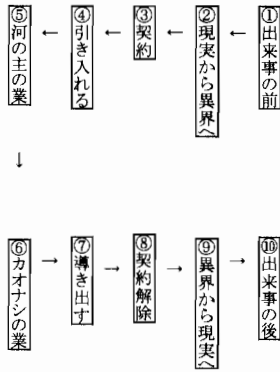
六、結果および考察

『千と千尋の神隠し』は、二つの異郷訪問譚で構成されている。この二つの異郷訪問譚(譚Iおよび譚II)にポップの「裏返し」モデルを適用したところ、以下のような知見を得ることができた。

〈譚I〉

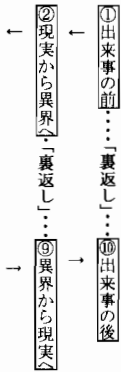
◆統辞的視点

譚Iを統辞的な視点から観察すると、譚Iは、次のように①から順に⑩へ至る構造となる。



◆系列的視点

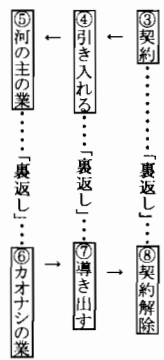
譚Iを系列的な視点から観察すると、譚Iは以下に示すような構造となる。ここで、①と⑩、②と⑨、③と⑧、④と⑦、⑤と⑥は、それぞれ「裏返し」の関係で対応している。



〈譚II〉

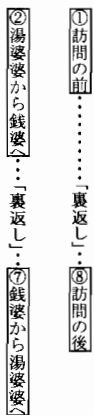
◆統辞的視点

統いて、譚IIを統辞的な視点から観察すると、譚IIは、次のように①から順に、⑧へ至る構造となる。



◆系列的視点

一方、譚IIを系列的な視点から観察した場合、以下に示すような構造となる。ここで、①と⑧、②と⑦、③と⑥、④と⑤が、それぞれ「裏返し」の関係で対応している。



③ 宝物の返納……………裏返し⑥ 宝物を受領

④ 消えたマジナイ(印)・裏返し⑤ 消えたマジナイ(坊)

以上のように、譚Ⅰおよび譚Ⅱは、本論の四節で例示した「パリ公主神話」に類似した構造を持つことがわかる。したがって、譚Ⅰおよび譚Ⅱは「裏返し」モデルによる構成である。ただし系列的視点で見た場合、「パリ公主神話」では、折り返し箇所該当する⑥が「対」になつていないのに対して、譚Ⅰの折り返し⑤と⑥および譚Ⅱの折り返し④と⑤では、「裏返し」の「対」を形成しているという違いがある。これらの知見から、『千と千尋の神隠し』は、ポツプが提示した典型的な「裏返し」の構成を持つ異郷訪問譚の典型的な事例であると筆者は評価した。

さらに、「こ」で得られた知見を、本論二節で紹介した田中による「ヒーローズ・ジャーニー」の形式にしたがってのパターン分析にあてはめてみると次のようになる。

【「ヒーローズ・ジャーニー」】

- ① 日常の世界
- ② 冒険への誘い
- ③ 冒険への拒絶
- ④ 賢者との出会い
- ⑤ 第一関門突破
- ⑥ 試練、仲間、敵対者
- ⑦ 最も危険な場所への接近
- ⑧ 最大の試練

【譚Ⅰ】

- ① 出来事の筋
- ② 現実から異界へ
- ③ 現実から異界へ
- ④ 現実から異界へ
- ⑤ 契約
- ⑥ 引き入れる
- ⑦ 河の主の業
- ⑧ カオンの業
- ⑨ 導き出す

【譚Ⅱ】

- ① 訪問の前
- ② 訪問の筋
- ③ 湯婆婆から銭婆

⑨ 報酬

- ⑩ 帰路
- ⑪ 復活
- ⑫ 宝を持って帰還

- ⑬ 契約解除
- ⑭ 異界から現実へ
- ⑮ 出来事の後

- ⑯ 宝物の返納
- ⑰ 消えたマジナイ(印)
- ⑱ 消えたマジナイ(坊)
- ⑲ 宝物を受領
- ⑳ 銭婆から湯婆婆
- ㉑ 訪問の後

「こ」で、田中による「ヒーローズ・ジャーニー」の形式と本論で得られた「裏返し」モデルに基づく知見の対比を瞥見する限り、両者は互いに独立しているように見える。なお、この対比に関する詳細な分析および考察については別の機会に報告しようと思う。

『千と千尋の神隠し』には、「裏返し」の構成が数多く見出される。大林の見解では、「裏返し」による構成が異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」であるとしている。のだが、たとえそうであったとしても、この映画における「裏返し」の使用頻度は、他の異郷訪問譚と比較しても高いように筆者には感じられる。無論、このことは、他の異郷訪問譚の場合の「裏返し」の使用頻度と対比し確認すべき事柄である。この点については今後検証したい。

七、おわりに

本論では、映画『千と千尋の神隠し』に関する分析を、ポツプの「裏返し」モデルに基づいて行つた。本論で得られた知見は、この映画が典型的な「裏返し」モデルの構成であるということである。このことはつまり、この映画を異郷訪問譚の一種として見做すことは、分析上、有意な手法であるということを示している。

一方、我々の思考様式に対して及ぼすメディアの影響は大きい。ま

た、我々が受けたメディアによる影響は、容易に、人間関係にも及ぶだろう。二田は次のように指摘している。⁵⁾

メディアは生徒が日常的に接し膨大な情報を得ているにもかかわらず情報受容に何らの疑いも持たないものである。それが実は自己形成に大きな影響を与えており、さらには他者にも大きな影響を与えることを知っておくのは、これからの社会を生きる生徒にとって必要なことでもある。

このことに関しては筆者も同感である。筆者は、アニメーション映画『千と千尋の神隠し』の構造を従来の学問的な蓄積の上に位置付ける試みの一環として本論を書いた。

1 Pop, Mihai' Foflor literar romanesce', Editura Didactica, i Pedagogica, 1990.

2 石丸かずみ「千と千尋の神隠し」大ヒット 宮崎ワールドを研究する」『エッセイスト』七九巻四五号 毎日新聞社 二〇〇一年 〇月 四三・四四五頁

3 大濱裕「千と千尋」アカデミー賞受賞の裏舞台」『新潮45』三二巻七号 新潮社 二〇〇三年七月 一五八・一五六頁

4 松本行弘「神隠しの意味・不安夢からの脱出」千と千尋の神隠しの心理学的考察」『神戸親和女子大学児童教育学研究』二二号 神戸親和女子大学 二〇〇三年三月 三四・七〇頁

5 遠藤瑛子「中学校動画リテラシー教育の実践」総合単元「もうひとつの世界」千と千尋の神隠しの扉を開く」(第1学年)『全国大学国語教育学会発表要旨集』〇四号 全国大学国語教育学会 二〇〇三年五月 九二・九五頁

6 河原木有二、一氏由希、岡部利圭子「映像作品を用いた高校国語(現代文)の授業試案」宮崎駿『千と千尋の神隠し』「崖の上のポニョ」の場合」『九州女子大学紀要』五〇巻一号 九州女子大学 二〇二三年(八七) 〇三頁

7 佐藤洋一、松本尚美「ファンタジー(物語)の「読み方の基礎」基本から発信——到達目標(評価基準)を明確にした授業「評価開発(小学校4年生)」

『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』九号 愛知教育大学教育実践総合センター 二〇〇六年三月 一五・二三頁

8 二田貴広「国語科における「読解力」表現力」育成指導の試み」国語教育とメディアリテラシー教育との融合による「読解力」表現力の育成」『教育システム研究』二号 奈良女子大学 二〇〇六年四月 七三・八一頁

9 西條勉「千と千尋の神話学」新典社新書 二〇〇九年

10 有田和臣「千と千尋の神隠し」論」千の顔をもつ英雄」と三ツタウソンの幻影」『京都語文』一九号 佛教大学 二〇二二年一月 二二・二四四頁

11 田中稜平「映画『千と千尋の神隠し』に内在する英雄神話の構造」『PLUS』一九号 神奈川大学人文学会学生会 二〇一三年三月 九一・九七頁

12 角田巖、佐藤崇「千と千尋の神隠し」の连接的物語論」『生活科学研究』二七号 文教大学 二〇〇五年三月 一九頁

13 一般的には、統辞的關係(syntactic relation)と系列的關係(paradigmatic relation)は対立的な概念として理解されている。

14 大林太良「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』二号 日本口承文芸学会 一九七九年一月 一九頁

15 この種の分析には、いわゆる恣意が介入する余地がある。この点は、本論における方法論上の課題点であると筆者は認識している。

16 瀬田貞「幼い子の文学」中公新書 一九八〇年

17 いわゆる「本格的」な異郷訪問譚は「行つて戻ってくる」構成であるのだが、元の場所に戻らない構成を持つ異郷訪問譚もしばしば見出される。

18 浅野俊和「破綻の美学」アニメーション映画『千と千尋の神隠し』の物語構造分析」『児童文学論叢』九号 日本児童文学学会中部支部 二〇〇三年一月 一・一二頁

19 ジョセフ・キャンベル「千の顔をもつ英雄(上・下)」人文書院 二〇〇四年

20 前掲、田中論文。

21 映画『千と千尋の神隠し』の中では、「湯屋」が「油屋」という名称で描かれている。有田論文。

22 有田の論文では、キャンベルによる項目を「stage1」ないし「stage12」といふ言葉で表現している。本論では便宜上、田中の記載法に合せ、丸数字(①ないし⑫)による記載に改変している。

24 本論では、田中と有田が論文中で示した構成上の差異に関しての詳細な対比は行わない。

- 25 前掲、大林論文。
- 26 依田千百子「韓国の異郷訪問譚の構造」(『口承文芸研究』五号 日本口承文芸学会一九八二年五月)四七・五七頁
- 27 前掲、大林論文。
- 28 ポツの「裏返し」モデルに注目した論文には、大林(一九七九)や依田(一九八二)以外に加藤によるものがある。加藤泰「済州島の二つの神話の構造分析」(『民族学研究』四四卷一号 日本民族学会一九七九年六月)八三・九〇頁
- 29 前掲、依田論文。
- 30 前掲、依田論文。
- 31 この映画の主人公である千尋は、異界では「千」という名前と呼ばれるのだが、便宜上、本論では「千尋」という呼称で統一する。
- 32 本論では、湯婆たちが住む、「トンネルの向こう側の世界」を「異界」とした。
- 33 千尋の父は、トンネルが設置された建物を指し、一九九〇年頃に造られたテーマパークの残骸ではないかと推測している。
- 34 千尋の衣服の色も、緑系(洋服)と赤系(作業衣)で対照的である。
- 35 カオナシは、千尋が食べさせたニガタンゴの作用で、それまで食べた全てのものを吐き出すことになる。この姿は、大湯に浸かった「オクサレサマ」が大量のゴミを吹き出す様子と対比させているように見える。
- 36 宮崎駿『スタジオジブリ絵コンテ全集13 千と千尋の神隠し』徳間書店二〇〇一年一〇月
- 37 木部則雄「千と千尋の神隠し」に見る少女の成長物語——精神分析の視点から特集「思春期の女の子」(『児童心理』六三卷四号 金子書房 二〇〇九年三月)三九六・四〇一頁
- 38 譚Ⅱは、坊と湯バードに焦点をあてた異郷訪問譚でもあると言える。
- 39 銭婆と湯婆は双子の姉妹である。銭婆は、「二人で一人前なのに気が合わない」と言っており、一人が正反対の性格であることを千尋たちに伝えていゝる。これも、「裏返し」が描かれた事例の一つとして解釈できる。銭婆と湯婆は双子でありながら極めて対照的な特徴を持つ。
- 40 列車と白龍は細長い形体を持つという点で類似している。
- 41 髪止めは、坊、湯バード、カオナシが力をあわせて作り上げた。
- 42 千尋が白龍(ヘク)にニガタンゴを食べさせた後に、白龍の口から出てきた「生き物」を千尋が足で踏みつぶす場面がある。ここで千尋が踏みつぶした「生き物」は、湯婆がハクを支配するためのものであった。

- 43 宮崎(二〇〇一)に掲載された絵コンテの「カット135」には、宮崎の書き込みが「左はもとどりたくないのです」とある。この書き込みは、湯バードが自分の意志で元の姿に戻っていないことを指している。
- 44 ここでは、有田(二〇一一)に示された区分けとの対比は記さないが、この場合も、「裏返し」モデルに基づく区分けと独立しているように見える。
- 45 前掲、大林論文。
- 46 本論で紹介した「裏返し」箇所は全部ではない。紹介した以外の「裏返し」の箇所は作品中に見出される。より詳しい分析に関しては別の機会に報告したい。
- 47 前掲、二田論文。

(おおぎたのりあき/民俗学研究者)